

# 青刈エンバクの品種比較試験

玉代勢 秀 正  
福 地 稔

## I はじめに

青刈エンバクはイタリアンライグラスとともに冬季の飼料作物として重要なものである。亀谷<sup>1)</sup>はエンバクについて詳細な紹介を行ない、あわせて試験成績も発表している。今回市販の5品種を用いて追試を行なった。

## II 試験材料および方法

供試品種は日向黒（日向改良黒とは同一種である）、豊葉、雪印101号（101と略す）、前進の5品種である。播種はアール当り80gを昭和51年11月12日に畦巾40cmで行なった。施肥量は表1に示す通りで追肥は刈取毎に等量行なった。刈取は昭和52年1月17日、2月7日、3月4日、3月29日、4月20日の5回行なった。

表1 施肥量 (kg/a)

	豚糞	N	P	K
基 肥	23	1	0.5	1
追 肥		8		8
計	23	9	0.5	9

## III 試験結果と考察

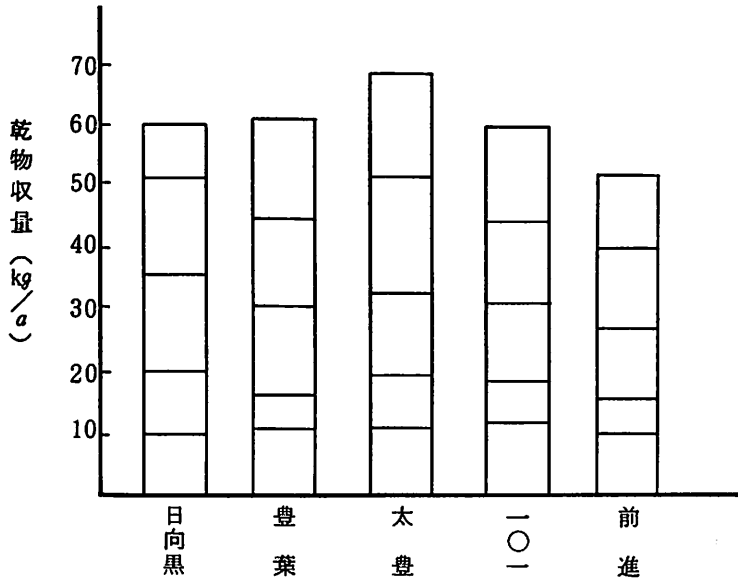
### 1. 初期生育

発芽および発芽前に品種間の差はなかった。1番刈迄の草丈の推移を表2に示す。草丈の伸長は前進、101、太豊がよく初期生育の早いことが示されている。1番刈時の茎数は日向黒が最も多く次いで豊葉、101、の順である。前進は分けつの少ない品種であった。1茎重は日向黒1に対し前進、101は1.5以上である。草丈、茎数、1番刈収量より初期草勢を推定すると101、太豊、豊葉が良いと思われる。

表2 草丈 (cm) 及び1茎重

	11月25日	12月9日	12月24日	1月8日	1月17日	1茎重比
日向黒	9.2 cm	18.1	27.4	45.3	57.9	1.00
豊 葉	9.7	20.1	31.9	50.8	65.5	1.34
太 豊	8.6	20.0	31.8	51.0	68.2	1.41
101	9.5	19.7	34.0	53.8	69.0	1.55
前 進	9.7	19.8	34.4	55.1	69.0	1.56

1茎重は日向黒を100とした標比である。



第1図 乾物収量

## 2. 収量

乾物収量を図1に示す。合計収量は太豊が最も高く、日向黒、豊葉、101がこれに次ぎ前進が最も低かった。亀谷の調査では101、太豊が高収量を示している。又著者らの予備調査では豊葉が高く次いで101、太豊が多収であった。このように試験結果は一様ではないが、太豊に収量の安定性があるようにみうけられる。3月迄の収量を比較すると各調査とも日向黒が最も高かった。

表3 刈取時茎数

	1月17日	2月17日	3月4日	3月29日	4月2日
日向黒	285	279	332	185	217
豊葉	243	237	297	224	285
太豊	237	244	294	240	209
101	240	213	326	212	255
前進	176	194	221	165	174

収量を茎数との関連でみるなら、3番刈（3月上旬）迄は茎数の増加により増収がもたらされている。日向黒は4番刈には出穂期に入るので茎数は少なくなるが1茎重の増加により収量を増している。太豊も同様な傾向を示し出穂期が近いことをうかがわせる。前進は茎数が最も少ない品種であり前述のように1茎重が大きい。又1番刈時において茎数の多い区程収量も高かった。これらのことから前進は他の品種より播種量をふやすことがよいと思われる。

## 3. 出穂、病虫害

日向黒に3月下旬に出穂が確認された。他の品種は出穂がみられなかった。4月上旬冠サビ病に罹病したが太豊と前進が比較的強いようである。

#### Ⅳ 要 約

市販5品種を用いて収量の比較を行なった。4月迄の利用だと太豊、3月迄の利用だと日向黒の栽培が有利だと思われる。

#### Ⅴ 文 献

- 1) 亀谷長邦：青刈エンバクについて、沖縄県畜産試験研究報告、第12号、23～31、1972